

シビックプライドを醸成させる小5向け副読本 富山市が「くすりのまちとやま」を発刊

発行：日本置き薬協会 事務局

富山市教育委員会は、このほど小学校5年生を対象として、富山の薬業への理解を深めてもらうための副読本「くすりのまちとやま」を発刊し、森市長が4月1日の定例記者会見で発表した。A4版37ページで5,000部印刷。会見で森市長は、副読本の活用により児童が「とやまのくすり」と薬業に関心をもち、富山が薬の街として発展してきた経緯を知ること、ふる

さとと富山を思う気持ちが高まることに期待を寄せた。

内容は、「富山といえば薬」として、「くすりの歴史」「くすりの今」「くすりの未来」の三つの章に分けている。

「くすりの歴史」では、反魂丹の伝来、「富山藩と売薬承認が二人三脚」で全国に広めたことと「先用後利」の仕組み、「柳行李」や「懸場帳」などの用具などを紹介。

「くすりの今」では、富山市内のくすり関連施設、主な製薬工場などに加え、広貫堂の「熊胆円」の製造工程を主に写真で説明。さらに印刷や容器などの周辺産業並びに売薬資本によって誕生した銀行や電力会社等の産業、海外での配置薬事業などを紹介している。また富山のくすりの強みとして、特徴ある剤形、日医工などのジェネリック医薬品製造の活躍も採りあげている。

「くすりの未来」では、2018年にノー

ベル医学・生理学賞を受賞した富山市名誉市民・本庶祐氏の研究を基に開発された「オブシーボ」や、くすりに関わる仕事として薬剤師、研究者、登録販売者並びに配置業者などを紹介している。

「くすりの富山」と県外者から言われても、県民が対応出来るようにとの要望と期待から企画されたのだろうか、ともかく特定の地場産業をテーマとした副読本は珍しい。

